

物語生成システムの観点からの物語言説論の体系化へ向けた試み

小方 孝

山梨大学工学部コンピュータ・メディア工学科

E-mail : ogata@esi.yamanashi.ac.jp

概要：文学理論においては、物語内容と物語言説の2つの方向から物語生成プロセスが取り扱われて来た。本稿では、このうち物語言説論へのアプローチとしてG・ジュネットの分類体系を検討し、その計算的モデルとしての再構成のための試みを示す。ここでは、ジュネットによる物語言説のための諸知識を、認知的戦略、構造的手法、認知的手法、形式的手法に分類し、最終的に形式的手法によって知識表現を操作するレベルまで下降する階層的な戦略-技法体系の素案を提唱する。

An Attempt for Systematization of Narrative Discourse Theory from the Viewpoint of Narrative Generation System

Takashi Ogata

Faculty of Engineering, Yamanashi University

Abstract: In literary theory, narrative generation process was treated from two directions of narrative content and narrative discourse. In this paper, we analysis G·Genette's narrative discourse theory, and show an attempt for its reconstruction. Here we divide various knowledge for narrative discourse by Genette into cognitive strategies, structural techniques, cognitive techniques, and formal techniques, and propose basic idea for hierarchical strategies-techniques system that finally goes down to the level to operate knowledge representation by formal techniques.

1 序論

これまで文学理論においては、物語内容と物語言説の2つの方向から物語生成プロセスが取り扱われて来た。これは、プラトンとアリストテレス以来のミメシスとディエゲシスの対立の伝統とも関連を持つであろう。もちろん対立と言っても、ミメシスの圧倒的優位を誇る対立であった。ところが20世紀の文学理論では、内容に対する言説の優位性という逆転現象が起こり、物語や文学の修辞学的理論が新たな装いの下に隆盛を誇るようになった。物語内容の研究に関しても、V・プロップやA・グレマスあるいはC・レヴィー＝ストロースらによる物語の潜在構造の記号論的抽象化をめざす研究が発展し、描写すべき現象そのものが持つ構造的な特性さらには認知的特性の問題の究明の方向へ研究が進化した。さらに顕著な動向は、M・バフチン、W・ブース、G・ジュネットらによる物語言説の修辞学的理論が進展し続けて来たことである。文学理論の世界では、これら2つの傾向はそれぞれ相対的に独立して研究・発展させられ、現在ではこれらを援用した様々な応用的研究が進められている。

認知科学や人工知能において、文学的創造性や文学的修辞の問題を計算的定式化をめざす方向で正面から取り扱おうとする研究は最近始まりつつあるが、その多くはアメリカ流プラグマティズムの伝統に乗った既存のAIの方法の延長線上に位置づけられるタイプの研究であり、またそのアプローチは物語内容の側面に偏重したものになっている。筆者はそのようなアプローチではなく、特に20世紀を中心とした文学の理論的研究の蓄積を計算的な方法で導入することをも通じて、物語生成のモデルとシステムを構築しようとしている。一貫した物語生成プロセスをモデリングしようとするならば、物語内容と物語言説を統合し、さらにそれぞれを詳細化しなければならない。当初は物語内容と物語言説をストーリーとプロット及び表層言語表現という形に単純化したシステムを構築した[小方 1996]が、現在はそれをさらに、登場人物の相互行動から創発する人工社会シミュレーションの生成[小方 1999c][長岡 1999]、現象のある部分に着目したストーリーラインの生成、物語言説の生成ないしはそれへの変換及び言語や映像を初めとした表現メディアへの変換という処理に分割して、より統合的で詳細なモデルとシステムへ発展させようと試みている。(さらに、物語の社会システムを含めたより包括的な理論の構想については[小方 1999a]に述べた。)

そのうち物語言説については、フランスのジュネットが広く人口に膾炙した体系を提唱し[ジュネット 1985]、それを

巡る議論やその応用研究が文学研究の領域ではさかんに行われるようになってきているが、筆者はこの理論を手掛かりとして、物語言説の網羅的な計算論的体系を構築することを目的に研究を進めている。研究の手順としては、①ジュネット理論の記述的再整理と物語生成の観点からの再構成、②物語言説に関わる戦略的知識からプリミティブな技法的（関数的）知識に至る物語言説階層の構成、③それを通じたジュネット理論の問題点の検討やその超克（体系の変更、知識の追加等）、④物語言説体系の設計、⑤物語言説生成システムとしての実装、という形で考えている。ここでは、このうち①と②の暫定的構成について紹介する。

2 ジュネット物語言説論への計算論的アプローチとその階層的再構成の方法

ジュネットの物語言説論はもともと、時間、不等時法、頻度、叙法及び態を上位項目とする物語言説の分類体系として構成されている。本研究では、物語内容から改編された物語言説の構造と、その改編を行う手続きとしての物語言説の手法との対応という観点からこの体系の再整理を試みた。例えば、[資料1]において、錯時法とは入力となる物語内容の構造を改編して何らかの形で時間的順序に変更を加えた物語言説を作り出す手法を意味する。

ところで分類体系としてのジュネットの物語言説の手法は、[資料2]に示すような階層的体系を持っている。この階層に基づいて、[資料3]にその一部を示すような形式でジュネット理論における知識の内実の再整理を行った。ここで、①下位構造的的手法とは当該の手法より階層的に下位にある手法のリスト、②概念とは手法の定義的な記述、③出力（言説のタイプ）とはこの手法の適用によって変換される物語言説の構造をそれぞれ意味する。なお、物語言説のための手法の概念は、ジュネットにおいては多くの場合出力すなわち言説のタイプと重複する記述によって定義されている。また、ジュネットが分類・定義した手法のレベルをここでは構造的手法と呼ぶ。すなわち、ジュネットの理論は構造的手法の説明によって構成されているが、本研究ではその記述をさらに、ある構造的手法の使用が物語の聴き手にもたらす認知的な効果ないしは機能と手法に分類する。語り手はこの効果・機能を達成することを目的に構造的手法を使用すると考え、この効果・機能を語り手にとっての認知的戦略という観点から捉え直す。例えば、[資料2]の〈外的後説法〉の認知的戦略は、作中人物の経歴を読み手に知らせることによって情報を補足することである。[資料4]に示したのは、認知的戦略に相当すると思われる記述の羅列である。

次の手法は、物語内容を具体的な物語言説の構造に変換する方法を意味する。上述の諸要素の関係は、ある物語言説の構造的手法を利用して聴き手に対する特定の認知的効果・機能を達成するためにある認知的戦略が採用され、そこから対応する手法の系列が導出されるというプロセスとしてまとめることができる。手法は、上述の構造的手法の他に、認知的手法と形式的手法に分類した。本研究の目的は、分類体系の単なる精緻化ではなく、稼働する物語生成システムの構築にあるため、最終的にプログラムの構造的表現を生成ないしは変換する手続きレベルでの手法にブレークダウンされなければならないが、このレベルの手法を形式的手法と呼ぶ。一方、登場人物や語り手の認知的な基準に基づく物語内容の物語言説への変換の指示をここでは認知的手法と呼んでいる。例えば、登場人物が昔のことを「主観的に回顧する」などがこれに当たる。回顧ないしは主観的な回顧自体は物語構造の直接的な処理を指示するものではないので、例えば、物語内容における一定の領域の「削除」とその別のポイントへの「挿入（導入）」といった形式的手法を利用することによってこの認知的手法が具体化されることになる。[資料5]に、ジュネットの記述において認知的手法のレベルと想定される方法を羅列する。形式的手法に類別されると思われる項目には、「挿入（導入）」、「削除」、「補填」、「迂回」、「一般化」、「欠落」、「反復」、「統合」、「描写」、「指示」、「交替」、「抽象化」、「間接化」などがあつた。

このように本研究では、物語言説論の再構成に当たって、それを構造的レベルと認知的レベルとの複合として把握する観点を基本としている。すなわち、構造的手法や形式的手法は物語の形態すなわち構造を操作するためのマクロ及びミクロの手法であり、他方認知的戦略や認知的手法は語り手や聴き手の認知レベルにおける効果や目的に基づく知識である。また、ここまでの研究を操作的な水準に移行させるには、認知的戦略を最上位階層として形式的手法を最下位階層とする知識階層として理論を再構成する必要がある。[資料6]は、そのような意図から構成された暫定的な階層的体系の一部である。IF-THEN ルールと関数的定義によって全体を構成することを意図しているが、まだそれぞれのルールや関数は未整理な記述に留まっている。

3 結論—考察と課題—

以下に、この試みの結果得られた考察や課題について整理する。

- ・当然ジュネットの原体系では、ここで提唱した戦略や手法の分類の記述が混在しているため、ジュネットの枠組みから離陸することを含めて、より精緻な知識体系へ向けて研究を再編して行く必要がある。
- ・例えば、認知的戦略のレベルに関してジュネットの理論はそれ自体の分類体系を構築しているわけではなく、主テーマである構造的手法の説明の便宜としてアドホックな記述を行っているに留まる。従って、それがどの程度包括的な物語戦略に関する知識体系となっているのかを検討することとが要請される。その方法としては、テキスト分析のほかプロトコル分析や認知的実験を通じた、認知科学的なアプローチも有効になるだろう。
- ・ジュネットの理論では、本稿での分類での下位階層に行くほど記述は脆弱になる。しかし、最下位階層である形式的手法は、これまでの筆者の研究における物語技法[小方 1996]のレベルにほぼ相当するレベルである。言い替えれば、認知科学や談話理論における文章の接続関係に関する研究に強く関連する部分であり、このレベルにおいては

改題された物語章説の構造	対応する物語章説の技法
(A) 時間の変更	
(1) 時間順序の変更	倒置法、物語内容の時間的順序とそれを提示する物語章説の順序のずれを操作する。 後説法
基準となる物語内容の時点よりも前の章節が後から語られる。	上記と同じであるが、同時に、それまで語られて来た物語内容の時間的順序の内部の章節が後から語られる。 内外的後説法
上記と同じであるが、同時に、それまで語られて来た物語内容の時間的順序の内部の章節が後から語られる。	内外的後説法
これらから起こる章節が先立って語られる。	先説法
上記と同じであるが、同時に、それまで語られて来た物語内容の時間的順序の内部の章節が後から語られる。	内外的先説法
同じく、それまで語られて来た物語内容の内部の章節が後から語られる。	内外的先説法
同じ時間帯について少なくとも2度語られる。	再説・予告
時間帯のどこに位置づけようかわからない部分。	空想法
様々な出来事やそれらの起り順などは無関係に寄せ集めて記述される。	共説法
(2) 神祕の改題	物語内容における時間的連続と物語章説における時間的連続との対応関係を操作する。物語章説の遅延(テンポ)の操作に相当する。
物語内容=0 / 物語章説=1、速度ゼロの言説。	休止法、描写により実現される。
物語内容=物語章説、リアルスピードの言説。	情景法、その代表は台詞。
物語内容>物語章説、ハイスピードの言説。	契約法、様々な任務により実現される。
物語内容<物語章説、ロウスピードの言説。話が無関係に相当する。	異時法
(3) 順位の改題	物語内容における出来事の生起の回数と物語章説における叙述の回数との関係が操作される。
<出来事の回数1> <叙述の回数1>の言説。最も一般的な形式。	単説法
<出来事の回数1> <叙述の回数2>の言説。同じ章節が何回も語られる。物語内容の時間的構成を混乱する要因となる。	反復法
<出来事の回数2> <叙述の回数1>の言説。叙回生起し操作が一回だけ行われる。	括弧法
異時法による言説と括弧法による言説が併発して移行する。	契約法
(B) 叙述による改題	物語章説は物語内容を構成するすべての情報を伝達することは不可能であり、その提示に当たっては情報の大規模な別割と加工を行っている。そのような意味での物語情報操作を行う。
(1) 距離、物語章説への語り手の介入度	語り手の介入度により情報量の調節を操作する。
再現された言説による作中人物の言葉、メモリーンス性が高い(介入度)の小さい直接話法の形式。	直接話法
再記された章節による作中人物の言葉、中間的な距離(介入度)を持つ。間接話法の形式。	間接話法
語られた(物語化された)言説による作中人物の言葉、距離が低い、語り手による叙述の形式。	言葉更新法

改題された物語章説の構造	対応する物語章説の技法
(2) パースペクティブ、視点、焦点化、フィルターによる改題	制限的に作用する何らかの視点を採用すること、または採用しないことによる物語情報を制御する。 焦点化ゼロの採用
如何なる物語的要素も採用されない言説。視点(語り手)による視点、視点的な、いわゆる神の視点、全知の語り手による視点、視点的には、物語世界のあらゆる時間空間で起こった出来事やあらゆる章節、人物の内面を記述することが可能である。	内外的焦点化の採用
作中人物の心理や知覚により物語世界が記述される言説。作中人物の心理や知覚により世界としての人物の思考や心理により物語章説が構成される。	内外的焦点化の採用
ある対象(人物)を描く時、寧ろその外面だけしか描かないような言説。行動主義の小説に相当する。	外的焦点化の採用、カメラアングルの技法
(3) 焦点化の選択と変化	
特定の作中人物の視点が一貫して守られる言説。	固定焦点化の技法
視点が移動する言説。	不定焦点化の技法
同一の出来事や章節の視点から語られる言説。	多元焦点化の技法
支配的な焦点化のコードが一時的に脱記される部分を含む言説。	変調の技法
上記のうち、支配的な焦点化のコードからすれば当然期待されるべき章節が叙述されない言説。	脱説法
同じく、ある焦点化コードに基づけば本来予想すべき情報が報告されない言説。	冗説法
(C) 際	
(1) 語り手の時間的動作	物語内容における特定の時点においてそれより過去の章節が物語られる物語章説。過去時制が使用される。 後置的な技法
物語内容における特定の時点においてそれより未来の章節が物語られる物語章説。未来時制が使用される。	前置的な技法
物語内容と語る行為とが同時的な物語章説。現在時制が使用される。	同時的な技法
物語内容の語法点の間に語り手の時点が導入的に位置づけられる物語章説。(語る行為そのものが物語内容の一部を構成する。)	挿入的な技法
(2) 語り手の水準の操作	語り手が位置づけられる水準(世界)と物語世界との関係を操作する。 物語世界外的語り手の設定と操作 物語世界内的語り手の設定と操作
語り手が作中人物を指して<私>と語り、語り手と語り手との関係性(第一人称)は同一性を維持する。(第二人称の語り手)	物語世界外的語り手の設定と操作
語り手は物語世界内に位置し、登場人物であり語り手となる。(第二人称の語り手)	物語世界内的語り手の設定と操作
物語世界内に位置する人物によって語られる物語=メタ物語の物語章説。	メタ物語世界内的語り手の設定と操作、枠物語や入れ子型物語を形成する。
複数の語り手の水準を導入して相互に境界線記する物語章説。	複説法
(3) 人称(私)の存在	
語り手が「私」の存在	等質物語世界的な語り手のタイプの利用
上記に加えて、自己物語世界的なタイプ(語り手が主人公である物語章説)。	
語り手が<私>と書かない物語章説。	異質物語世界的な語り手のタイプの利用

[資料1] 物語章説の構造と手法の対応表

手法の階層

- <「精神」>
 - <精神法>
 - <混合的不等時法>
 - <劇的な情景法と非劇的な要素法との交響>
 - <典型としてのではないはサンプルとしての情景法>
 - <減速された情景法>
- <「顔度」の置換手法>
 - <顔起法>
 - <反置法>
 - <括置法>
 - <数詞的括置法もしくは括的括置法（「括置的共置法」の一種）>
 - <内括置法もしくは総合的括置法（「括置的共置法」の一種）>
 - <擬似括置法（「括置的共置法」の一種）>
- <（物語）叙法>
 - <距離の（物語）叙法>
 - <極限的叙法（ミメーシス的叙法）>
 - <物語的叙法>
 - <転置的叙法（1）（間接話法による転置的叙法）>
 - <転置的叙法（2）（自由間接話法による転置的叙法）>
 - <焦点化の物語叙法>
 - <全知の語り手による焦点化の物語叙法>
 - <内的焦点化による物語叙法>
 - <内的固定焦点化による物語叙法>
 - <内的不定焦点化による物語叙法>
 - <内的多元焦点化による物語叙法>
 - <外的焦点化による物語叙法>
 - <物語叙法における変調>
 - <懸置法>
 - <冗置法>
- <態の手法>
 - <後置的な語り>
 - <前置的な語り>
 - <同時的な語り>
 - <挿入的な語り>
 - <メタ物語世界の物語置換の手法（語りの水準に基づく手法①）>
 - <因果関係による語りの水準の移行手法>
 - <材料にテーマ論的な関係による語りの水準の移行手法>
 - <非明文的関係による語りの水準の移行手法>
 - <転置法（語りの転置法）>
 - <還元されたメタ物語世界（もしくは擬似物語世界）のための転置法>
 - <語り水準に基づく手法②>
 - <異質物語世界外の物語置換の手法>
 - <異質物語世界内の物語置換の手法>
 - <異質物語世界内の物語置換の手法>
 - <等質物語世界内の物語置換の手法>
- <「時間」>
 - <後置法>
 - <外的後置法>
 - <内的後置法>
 - <異質物語世界の内的後置法>
 - <等質物語世界の内的後置法>
 - <等質物語世界の内的後置法（温飽）>
 - <構造的後置法（温飽）>
 - <偶然たる省略>
 - <転置法（迂回的省略、暗示的省略法（挿字、互回の後置法）>
 - <括置的省略>
 - <反置の後置法（再置）>
 - <混合の後置法>
 - <部分の後置法>
 - <充足の後置法①>
 - <充足の後置法②>
 - <充足の内的後置法>
- <先置法>
 - <内的先置法>
 - <異質物語世界の内的先置法>
 - <等質物語世界の内的先置法>
 - <構造的先置法>
 - <括置的先置法（数詞的先置法）>
 - <反置的先置法（予告）>
 - <材料の短い予告（反置的先置法における）>
 - <材料の長い予告（反置的先置法における）>
 - <布石または伏線としての予告（反置的先置法における）>
- <外的先置法>
 - <空想法>
 - <複合的懸置法>
 - <不等時法「特異」と「態度」>
 - <要約法>
 - <休止法>
 - <省略法>
 - <明示的省略法>
 - <指示的な明示的省略法（1）>
 - <明示的・指示的な截修飾的省略法（1）>
 - <明示的・指示的な明示的省略法（2）>
 - <明示的・要約的な截修飾的省略法（2）（明示的・要約的な截修飾的省略法）>
 - <暗示的省略法>
 - <材料に仮想的な省略法>

[資料2] 物語言説の手法の階層的構成

＜雑時法＞：「時間」

下位構造的手法：後設法、先設法、空時法、複合的雑時法。

概念：物語世界（内容）において、起こる出来事の時間的順序と、物語表現（言説）において布置されたそれらの出来事の疑似時間的順序との関係を創出する。雑時法は、過去であろうと現在であろうと、「現在」の時点から（物語言説が中断されて雑時法が空を現す物語内容の時点から、その程度こそ様々であるが、向がしかの距離を置いたところに位置している。そこで、その両者を隔てる時間的距離を、その雑時法の「射程」と呼ぶ。雑時法はまたそれ自体、程度の差はあれある長さを持つた物語内容の特長を覆っている。これを振幅と呼ぶ。

出力（言説のタイプ）：「第1次物語言説」と「第2次物語言説」が連続する物語言説。第1次物語言説とは、ある雑時法を雑時法として定義することがそれとそれとの関連において可能となるような時間的水準に位置するよう物語言説であり、第2次物語言説とは、第1次物語言説の中に挿入（導入）されているレベルの物語言説である。

認知の観察：（それぞれ下位分類毎に設定される。）しかしその総体的効果は存在するのではないか？

形式的な手法：（それぞれ下位分類毎に設定される。）

＜後設法＞

下位構造的手法：外的後設法、内的後設法。

概念：物語内容の現時点に対して先行する出来事の後になってから喚起する語りの操作の総称。

出力（言説のタイプ）：第1次物語言説の中に、それよりも過去に位置する第2次物語言説が含まれた物語言説。

認知の観察：（それぞれ下位分類毎に設定される。）

形式的な手法：（それぞれ下位分類毎に設定される。）

＜外的後設法＞

下位構造的手法：ナン。

概念：その「振幅」の全域が「第1次物語言説」の外側にはみ出さず後設法。出力（言説のタイプ）：第1次物語言説の中に、その振幅の全域がその外側にはみ出さず過去の第2次物語言説を包含した物語言説。

認知の観察：作中人物のしかじかの経歴を読み手に知らせて、第1次物語言説を補足することに限られる。

- ① 新たに登場した作中人物について、語り手がその経歴を明らかにしようとする。
② 暫く前から見失われていた作中人物について、語り手がその経歴を改めて把握しようとする。
認知の手法：①主観的回顧、②客観的回顧、③単なる逆戻り。

形式的な手法：第1次物語言説のある時点において、振幅全域がその外部であるような一まとまりの過去を「挿入（導入）」する。

＜内的後設法＞

下位構造的手法：異質物語世界の内的後設法、等質物語世界の内的後設法。

概念：その振幅の全域が第1次物語言説の内側にある後設法。その時間域が第1次物語言説の時間域に包含されている。出力（言説のタイプ）：第1次物語言説の中に、振幅の全域がその内側に位置する過去の第2次物語言説を包含した物語言説。

認知の観察：（それぞれ下位分類毎に設定される。）

形式的な手法：①主観的回顧、②客観的回顧、③単なる逆戻り。

形式的な手法：第1次物語言説のある時点において、振幅全域がその内部であるよう

な一まとまりの過去を「挿入（導入）」する。

＜異質物語世界の内的後設法＞

下位構造的手法：ナン。

概念：その振幅の全域が、第1次物語言説の内側に留まるが、特殊として物語の全域、つまり第1次物語言説の語る物語内容（複数でも構わない）とは異なる過去の物語内容を対象としている後設法。

出力（言説のタイプ）：第1次物語言説の中に、振幅の全域がその内側に位置する過去の第2次物語言説を包含した物語言説。但し、第2次物語言説は第1次物語言説の語る物語内容（複数でも構わない）とは異なる過去の物語内容を対象とする。

認知の観察：

- ①新たに登場した作中人物について、語り手がその経歴を明らかにしようとする。
②暫く前から見失われていた作中人物について、その最近の過去を改めて把握しようとする。
認知の手法：①主観的回顧、②客観的回顧、③単なる逆戻り。

形式的な手法：第1次物語言説のある時点において、振幅全域がその内部であるような一まとまりの過去。但し第1次物語言説の語る物語内容（複数でも構わない）とは異なる過去の物語内容を「挿入（導入）」する。

＜等質物語世界の内的後設法＞

下位構造的手法：複定的後設法（追説）、括弧的省略、反復の後設法（再説）

概念：その振幅の全域が第2次物語言説の内側に留まり、第1次物語言説と同系列の筋を対象とする内的後設法。出力（言説のタイプ）：第1次物語言説の中に、振幅の全域がその内側に位置する過去の第2次物語言説を包含した物語言説。但し、第2次物語言説は第1次物語言説と同系列の筋（物語内容）を対象とする。

- ① 第1次物語言説との関連で冗長に語る可能性・危険性がある。
②第1次物語言説との関連で「干渉」作用が生じる可能性・危険性がある。干渉とは、内的後設法（第2次物語言説）の時間域が、第1次物語言説の時間域と重複することである。
認知の手法：①主観的回顧、②客観的回顧。

形式的な手法：（それぞれ下位分類毎に設定される。）

＜複定的後設法（追説）＞

下位構造的手法：純然たる省略、既設法

概念：その振幅の全域が第1次物語言説の内側に留まり、第1次物語言説と同系列の筋を対象とする内的後設法であるが、特に、物語言説における過去の部分の文章を後になってから演じた「回顧的切片」を含む後設法。

出力（言説のタイプ）：第1次物語言説の中に、振幅の全域がその内側に位置する過去の第2次物語言説を包含した物語言説。特に、物語言説の過去の部分の文章を後になってから演じた「回顧的切片」を含むよう第2次物語言説。

認知の観察：過去において隠蔽されていたものを目のめかす。形式的な手法：①主観的回顧、②客観的回顧、③単なる逆戻り。

形式的な手法：部分的に時間の流れから独立した「物語論理」に基づき、一時的な「削除」及び程度の差こそあれある長さの時間を経過した後の「補填」によって編制される。

<印刷法> 【印刷】
 ① IF (印刷法) (物語世界 (内容) において、確認する出来事の時節の順序と、物語表現 (意味) において位置されたそれらの出来事の時節の順序との関係を算出する。)

THEN (印刷法)

② IF (印刷法) (物語表現の順序) に対して先行する出来事を検出してから検記する。
 (第1次物語表現の中に、それよりも後述に位置する第2次物語表現が含まれた物語表現を作る。)

THEN (印刷法)

③ IF (印刷法) (物語表現) を導入する。すなわち、物語表現のその時点においては評語による出来事を予め導入する。
 (第1次物語表現の中に字句的、すなわち未来の「暗示 (注のめかし)」の物語表現を導入した物語表現を作る。)

(「回顧的性質」に基づく未来の「暗示 (注のめかし)」の物語表現を実現する。他の如何なる物語表現にもまして、「一人称」で語られた物語表現の場合は、その「回顧的性質」が明白であるという事実そのものによつて、予定された階級の成立し、作り出す機能) 置かれていた状態を「暗示」することのできるものであつて、そうした「暗示」が置かれた語り手の関係の一つとなつていく。)

THEN (印刷法)

④ IF (印刷法) (物語表現) の時間的順序を一切取り除き、他の出来事との関係からどのようにも時間的な位置を定めていく出来事も存在する。こうした出来事が存在した場合には、これらの出来事が取り出されている状態が、別の出来事ではなくて「時間的表現」でありさえすれば良い。このような、一切の時間的関係を剥ぎ取られた物語表現「意味法」と呼ぶ。つまり、それらを見る物語の時間的順序に對する一切の時間的関係、さらにはそのような時間的順序の物語表現に對する逆の時間的関係から自らの位置を捉え持つ機能法を意味法と呼ぶ。一切の時間的関係を剥ぎ取つた上で、果つた出来事が取り出され、物語表現の時節的自立能力の提示—それが出来る物語世界の時間的順序に對する一切の依存関係 (意味) は、そのような時間的順序の、物語表現に對する逆の依存関係) から自らの位置を算定する能力を、意味法による物語表現と呼ぶ。

THEN (印刷法)

⑤ IF (印刷法) (意味法) を導き出させレベルでの意味法を作る。)

THEN (導き出された意味法)

<検出法> (検出法)
 ① IF (検出法) (その「検出」の全体が、「第一次物語表現」の外側にはみ出し後述法を作る。)
 (第1次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の第2次物語表現を含むした物語表現を作る。)

THEN (外側検出法)

② IF (検出法) (その表現の全体が第一次物語表現の外側にある検出法。その時間域が第1次物語表現の時節域に包含されている。)

THEN (外側検出法)

(第1次物語表現の中に、表現の全体がその外側にはみ出す過去の第2次物語表現を含むした物語表現を作る。)

THEN (外側検出法)

<外側検出法>
 IF (外側検出法) (新たに登場した作中人物について、語り手がその経歴を明らかにしようとする。)(置く前から見られていた作中人物について、その最近の過去を改めて把握しようとする。)

THEN (回復)

<<回復>>
 ① IF (回復) (生體が回復を実現する)
 THEN (生體が回復)

② IF (回復) (生體が回復を実現する)
 THEN (生體が回復)

③ IF (回復) (生體が回復以外の方法で回復を実現する)
 THEN (生體が回復)

<<主観的回避>>
 (DEFUN 主観的回避
 (A1: 基準となる物語表現
 A2: 挿入する物語表現
 A3: 基準となる物語表現における挿入ポイント)
 ((プロセス)))
 第2次物語表現を発生させた物語表現)
 第2次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の物語表現の存在する時間において、表現の全体がその外側にはみ出す過去のようになつてしまふ過去の法。但し第1次物語表現の他の物語表現 (復元でも構わない) とは異なる過去の法。主観的に「挿入 (挿入)」する。

<<客観的回避>>
 (DEFUN 客観的回避
 (A1: 基準となる物語表現
 A2: 挿入する物語表現
 A3: 基準となる物語表現における挿入ポイント)
 ((プロセス)))
 第2次物語表現を発生させた物語表現)
 第2次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の物語表現の存在する時間において、表現の全体がその外側にはみ出す過去のようになつてしまふ過去の法。但し第1次物語表現の他の物語表現 (復元でも構わない) とは異なる過去の法。客観的に「挿入 (挿入)」する。

<<単なる逆戻り>>
 (DEFUN 単なる逆戻り
 (A1: 基準となる物語表現
 A2: 挿入する物語表現
 A3: 基準となる物語表現における挿入ポイント)
 ((プロセス)))
 第2次物語表現を発生させた物語表現)
 第2次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の物語表現の存在する時間において、表現の全体がその外側にはみ出す過去のようになつてしまふ過去の法。但し第1次物語表現の他の物語表現 (復元でも構わない) とは異なる過去の法。主観、客観とは関係なく「挿入 (挿入)」する。

<<挿入 (挿入)>>
 (DEFUN 挿入 (挿入) >>
 (A1: 基準となる物語表現
 A2: 挿入する物語表現
 A3: 基準となる物語表現における挿入ポイント)
 ((プロセス)))
 第2次物語表現を発生させた物語表現)
 第2次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の物語表現の存在する時間において、表現の全体がその外側にはみ出す過去のようになつてしまふ過去の法。但し第1次物語表現の他の物語表現 (復元でも構わない) とは異なる過去の法。主観、客観とは関係なく「挿入 (挿入)」する。

<<挿入 (挿入)>>
 (DEFUN 挿入 (挿入) >>
 (A1: 基準となる物語表現
 A2: 挿入する物語表現
 A3: 基準となる物語表現における挿入ポイント)
 ((プロセス)))
 第2次物語表現を発生させた物語表現)
 第2次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の物語表現の存在する時間において、表現の全体がその外側にはみ出す過去のようになつてしまふ過去の法。但し第1次物語表現の他の物語表現 (復元でも構わない) とは異なる過去の法。主観、客観とは関係なく「挿入 (挿入)」する。

<<挿入 (挿入)>>
 (DEFUN 挿入 (挿入) >>
 (A1: 基準となる物語表現
 A2: 挿入する物語表現
 A3: 基準となる物語表現における挿入ポイント)
 ((プロセス)))
 第2次物語表現を発生させた物語表現)
 第2次物語表現の中に、その表現の全体がその外側にはみ出す過去の物語表現の存在する時間において、表現の全体がその外側にはみ出す過去のようになつてしまふ過去の法。但し第1次物語表現の他の物語表現 (復元でも構わない) とは異なる過去の法。主観、客観とは関係なく「挿入 (挿入)」する。

【資料6】 物語表現の戦略—技法の概念的な階層的体系 (一部)